

学問の営みの原点

北原 和夫

(教養部 物理学)

春は卒業式、入学式のシーズンである。学生にとっては勿論、大学にとっても、卒業式、入学式は、その前後に区切りをつける重要な時であり、晴れやかなものである。入学式は大学生活の出発を祝うものであり、卒業式は文字通りには、大学での学業を終えることを祝う、ということであるが、英語では commencement と呼び、入学式と同じような「出発」のお祝いの式という意味を持つ。このことは大きな示唆を含む。即ち、大学における学生生活が意味のあるものであったか否かは四年間に為し終えたことを振り返ることによって判断されるのではなく、「出発」の時点でのような一歩を踏み出したかによって決定的なことになるのである。その一歩は遅くかつ回り道をする必要がなくても、必ず前進する力強いものでなければならぬ。その力強い歩みの原動力は一体何であるべきか。学問と、「出発」後の歩みとは、どのような関係にあるのだろうか。春の「出発」のシーズンに際し、このような問題について、私なりの所感を述べてみたいと思う。

こんなテーマで筆を執ったのは、学問が小学校から大学まで一貫した教育機関で系統的に行われるようになって現在の現在、学問の営みに関する倒錯があるのではないかと、学問を私的な所有物或いは武器と考えるより良い「学問」を身につけて他人との競争に打ち勝つことに意味を見出す一般の風潮がある。受験競争を見るまでもなく、研究

者の間にも、極秘に最新の情報を得て、自分なりの仕事を極秘で行い、結果が出たら早急に発表して競争者を追い落とす、ということに懸命になっている人々が多い。そうなったら、学問は一つのゲームである。人間の営みがすべて勝ち負けを決めるゲームということなのだろうか。最近、新しいゲームが考案される度に爆発的ブームが起るといふのも、このような一般的風潮の顕われのように思われてならない。

私は、学問は本来もつとおおらかなものであると考えている。同じ様なことを研究している人が居たら、出掛けて行って一緒に仕事をすればよい。研究の経過が常に他人の目にとまるようにしておけば仲間はずれと増えてくる。経歴も常識も全く異なる人が仲間に加わってきたら、それこそエキサイティングなことである。全く新しい観点を提供してくれるし、時には、私自身をすっかり変えてくれるだろう。反面、そういう異なったタイプの人と一緒に仕事をすることは、実にシンドイことでもある。言葉や心がツーカーとは通じないので、いつも初めから説明しあわなければならぬし、時には激論や行き違いも起る。面倒くさくなると、一層のこと、一人で片付けた方が速いと思うに到る。しかしながら、たとえ能力が悪いように見えても、異なるタイプの人間が協同して仕上げた仕事の方が、結局出来上りが良いのである。「良い」という意味は、その仕事を仕上げた人間のタイプが異なれば異なる程、その仕事はより広

く人々に理解され、また、より広く人々を励ます、という普遍性を持つということである。何故なら、その仕事は、異質であった人達が相互理解しあった結果だからである。学問に限らず、凡そ、人間の精神の営みは本来このようにおおらかなものであるべきではないか、と思う。文化的背景も能力も異なる人間が、それぞれの個性を生かしながら共に働くということは、何と素晴らしいことではないか。このおおらかなさ身につけ実践することが、人生を貫く基本的なことではないだろうか。良い仕事を為すことを可能にさせるものは、実は個人の持つ知識技術の量ではなく(それは常に有限である)、心を開き耳を傾け助け合ってゆくこのおおらかな精神(それは無限の可能性を持つ)である。大学における教育が、「出発」する若者達に、このような精神の弾みをつけることができたなら、大学の教育の目的が全うされたと言つてよいであろう。

しかしながら、我々は競争こそが、文化の発展の原動力である、というような錯覚にいつの間にかとらわれているのである。少しでも成果があがると、自分の力で勝利を収めたかの如く誇り、一方で、自分に足りない所を見て自己嫌悪に陥る。このような精神状況では決して自分を超越することができないのである。自らの殻に籠り、その中の小さな土俵で一人相撲や、或いは、せいぜい気心の知れた身内の者だけで相撲を取つていたところで、一体何を創造することができようか。

然らば競争によらず、おおらかな精神によって営まれる学問とは何であろうか。それは、「事実」の重さを認識する学問である。これに反し、ゲームとしての学問にとつては、「事実」は不要であつて「虚構」で十分なのである。私は学問の出発点は「事実」に直面した時の単純な驚きでなければならぬと思う。そのような単純さから出発した時のみ、学問的成果として到達したところは単純な言葉で語れるのである。単純さとは、普遍性ということでもある。専門家としての「学者」の使命は、単純な驚きをもつて捉えた諸事実の因果連関を高度の技術による実験と推理によって解明し、自ら「然り」と納得することであるが、ここで大事なこととは、初めの単純な驚きと終りの「然り」において、非専門家のないわばアマチュアとしての自分に帰ることである。そうではなくて、初めの出発点が専門家同志の身内でしか通じないような技術的などころである。細かい議論が沸き競争も生まれて一見学問が活気を帯びているように見えても、外の人にはさっぱり訳がわからない。実はこのような形で行われる学問が権威ある学問である(他人にはわからない、という意味で)として誤解されることが多いのである。「事実」の重みは個人の偏見予断を許さず、万民の前に厳然としてある。このことを認識した時、個性を超えて人間同志が共にこの「事実」に立向かうことができるのである。その「事実」がたとえ困難なものであつても、おおらかな精神をもつ立向かうならば、決して疲れることがない。